

第3節

戸田市のおしゅれを具現化する水辺活用術

日本大学理工学部まちづくり工学科教授 岡田 智秀

はじめに

ここでは現地踏査によってそのポテンシャルが捉えられた「戸田漕艇場」と「彩湖・道満グリーンパーク（以下、彩湖）」の2つの水辺に焦点を当て、第2章第2節で述べた“水辺の豊かさの享受“という観点から、水辺拠点づくりとして「戸田市における水辺を中心とした具体的戦略」を論じる。また、水辺の拠点づくりとして米国沿岸域管理法（Coastal Zone Management Act）でもその重要性が指摘されている水辺のアクセス性に着目し、「水辺拠点と市街地（主要駅）を繋ぐ戸田市流空間デザイン」についても述べていく。

そこで、まずは上述した戦略のベースとなる戸田市まちづくりビジョンの考え方や、戸田市における水辺拠点形成の意義を明示する。

（1）戸田市のまちづくりビジョンの考え方

現状の戸田市の人口は安定傾向にあり、特に子育て世代が中心という恵まれた状況にある。しかし、日本全体で人口減少が進めば、より好立地の地域へと人口流出の可能性も高まってくる。一般的に世代別にみた人口流出の背景には次のような一例が考えられよう。

○30～40代の子育て世代

子どもが手を離れると、安価でコンパクトな郊外住宅を求め、市外へと転居する可能性がある。

○子ども世代

都市部の大学を経験した後の住まいは、都心周辺をめざして市外へ転居してしまう可能性がある（戸田市が故郷になりうるか）。

○60歳以上の世代

地域活動や世代交流といった日常生活を送る生きがいがないと身

内が暮らす地域への転居の可能性がある。

そう単純ではないが、このような懸念を前提として、今後の戸田市のまちづくりビジョンを構築するための検討を行う。その際、戸田市の立地的な位置づけを認識しておく必要があろう。それは、いわゆる「首都圏近郊」という位置づけである。

つまり、埼玉県内において、北部のような自然地が卓越した地域でもなければ、南西部のような都市部でもない。前者であれば、エコツーリズムや体験農業といった観光戦略があろうし、後者の都市部であれば人口集中の利からエリアマネジメントといった地域戦略もあろう。しかし、近郊都市の戸田市にあっては、前者のような観光地級の自然性に乏しい一方、後者のような都市の規模や業務集積という面でも十分ではないことから、両者のアプローチは最善とは言い難い。一般的に人口減少社会における地域再生の処方箋は、交流人口促進といわれているが、本市のようにメジャー級の観光資源に乏しい近郊都市では、その手段がすべてではないと思われる。

そこで、本市のように現状として安定した人口を有し、特に子育て世代が人口の中心を占めるケースでは、交流人口促進のキーワードである「訪れたくなる」よりも、現状の地域住民を流出させない定住人口安定をめざす「住み続けたいくなる」というキーワードでまちづくりを推進すべきではなかろうか。ただし、注意すべきは、これらのキーワードは相反するものではなく、図5-11に示すような関係（サイクル）が成り立つと考えられるため、まちづくりビジョンの優先順位を検討するうえでのキーワードと捉えるべきであろう。

以上より、戸田市まちづくりビジョンの第一歩は「住み続けたいくなる」まちづくりであることを第1の提言とする。それゆえの取り組みとして重要なことは、地元住民が地元で過ごせる豊かなライフスタイルを構築することと認識する。戸田市の地元住民が集い・語らい・笑い・絆を育む、そんな空間づくりが望まれよう。



図5-11 戸田市まちづくりビジョンのプライオリティ

出典：筆者作成

(2) 戸田市において、水辺拠点形成する意義

本書の執筆コンセプトは、「戸田市流おしゃれなまちづくり」から端を発している。この「おしゃれ」について、その古典的舞台のひとつは、第2章第2節で述べたように、ウォーターフロント・プロムナードという水辺空間である。この視点で戸田市内の水辺を視察してそのポテンシャルを感じた場所が、戸田漕艇場や彩湖であった。知名度もそれなりに高い中で、利用者も多様な世代にのぼっている。他方、戸田市内の駅周辺部の賑わいづくりや景観整備については今後さらなる議論と時間を要すると思われる。このことから、まずは知名度と相当数の多様な世代の利用に供する戸田漕艇場や彩湖といった水辺を拠点に、そこから中心市街へと波及をめざす、「住み続けたい、水辺からのまちづくり」を第2の提言として掲げたい。

なお、おしゃれの古典的舞台が水辺だとはいえ、ここでは回顧趣味で着飾ったそぞろ歩きをめざすものではない。水辺という開放的な非日常空間で地元住民が集い・語らい・笑い・絆を育む、そんな姿をお互いに見る一見られる関係で人間性を回復（リフレッシュ）する。そのような現代の視点で、以降はそのあり方を論じていく。

1 事例分析 戸田漕艇場と彩湖の現状・課題



写真5-3 戸田漕艇場と彩湖の位置図

出典：戸田市提供資料をもとに筆者作成



写真5-4 彩湖道満グリーンパーク

出典：戸田市

概要

戸田漕艇場や彩湖など、“絵になる水辺のアクティビティ”が存在するが、それを「戸田のイメージ」として心象に焼き付ける空間（ビューポイント）が不足しているように感じられる。

現状と課題

(1) 戸田漕艇場

戸田漕艇場は「漕艇」という保守本流の利用で平日・休日問わず利用者が満杯の状況という。特に、大きな大会の開催日には全国から多数の関係者や見物客で賑わっている。加えて、漕艇場の敷地内には関東の名だたる大学・大手企業漕艇部の合宿所が立ち並び、その様相は、戸田漕艇場の格の高さを物語っている。

しかし、その一方で、市内の駅名にもなっている「戸田公園」が漕艇場の絶好のビューポイントになっているにもかかわらず、現状ではリフレッシュするスポットあるいは癒しのスポットとなるまでの整備には至っていない。

(2) 彩湖

戸田漕艇場は、多様な世代にわたるボート選手に限られた利用であるのに対して、彩湖は、多様な世代が多様な水辺レクリエーションを楽しめる場となっていて好対照の関係にある。後述するように、そのレクリエーション風景は、季節や時間帯によっても多様である。さらに、戸田漕艇場には不足している一般利用者の飲食が楽しめるバーベキュー場も整備されている。

しかし、そのバーベキュー場は、あくまでもその主体のみが楽しむ空間になっており、そこから多様な水辺レクリエーション風景が楽しめる状況ではなく、逆に、水辺レクリエーションを行う主体からバーベキューを觀賞する空間にはなっていない。

つまり、両者共通の課題として、それぞれ利用主体が楽しめる環境が整っているものの、ウォーターフロント・プロムナードのような主体間を見る一見られる仕掛けが不十分であるといえる。“絵になる水辺のアクティビティ”を「戸田のイメージ」として心象に焼き付ける空間（ビューポイント）づくりが求められよう。

2 戸田漕艇場における景観資源と具体的戦略

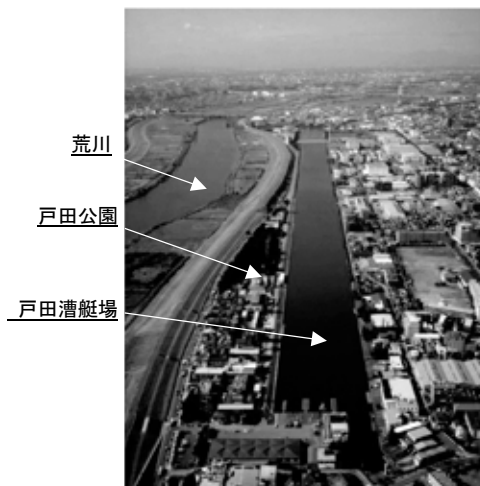


写真5-5 戸田漕艇場全景

出典：戸田市提供資料をもとに筆者作成



写真5-6 漕艇場夕景

出典：戸田市



写真5-7 レース風景

出典：戸田市

概要

戸田漕艇場の水辺景観資源が享受できるカフェ・レストランの整備が望まれる。その適地に戸田公園がある。都市公園法の規制緩和が進んでいるため公園管理者との協議により整備可能である。

景観資源及び具体的戦略

(1) 戸田漕艇場及びその周辺部の水辺景観資源

①漕艇の景

- ・西側に向いている戸田公園からのサンセット風景。
- ・戸田公園の桜を背景とする漕艇風景。

②花火の景

- ・戸田公園から望む戸田橋花火大会の風景。

(2) 漕艇場において水辺空間価値を高めるための具体的戦略

①漕艇場の豊かな水辺景観享受に資する戸田公園内の店舗立地

- ・富岩運河環水公園をモデルとするカフェ又はレストラン整備により、飲食を楽しみつつ漕艇場の水辺風景が楽しめる空間整備。

②仮設店舗から社会実験的展開

- ・仮設店舗は撤退しやすい分だけ出店リスクが緩和できる。

③店舗の高低差をいかした多様な視点場創出

- ・第2章第2節で述べたように水辺風景は視点の高低差により興味対象が変化する。多様な対象が楽しめるよう店舗屋上も利用可能な形態が望ましい。戸田橋花火大会の眺望点としても貢献できよう。

④店舗デザイン

- ・背後から漕艇場への見通しに配慮。
- ・店名やインテリアなどは漕艇にちなんだものを。
- ・店舗照明による倒景のほか、店内の賑わいと店舗外の人々との見る－見られる関係性を構築するという観点から透明感のあるガラス系の建築形態が望まれる。

⑤夜景演出

- ・夜間の集客を考えるのであれば、当地域は夜間は暗闇になるので、それを逆手にとって水面のライトアップも一考に値しよう。

3 彩湖における景観資源と具体的戦略



写真5-8 彩湖全景

出典：戸田市



写真5-9 バーベキュー場

出典：戸田市



写真5-10 彩湖水上周

出典：戸田市



写真5-11 彩湖サイクリング

出典：戸田市

概要

彩湖は水・陸の多様なアクティビティが見られる一方、それを観賞する視点場が未整備である。河川管理者と調整を図り、多様なアクティビティが観賞できるビュースポットを整備したい。

景観資源及び具体的戦略

(1) 彩湖の水辺景観資源

①湖面の景

②水辺レクリエーションの景

- ・セーリング系（ディンギー、ウインドサーフィン等）。
- ・ボート系（カヌー、カヤック等）。
- ・パドルボード系（Stand Up Paddleboard；SUP）。

③陸上アクティビティの景

- ・戸田マラソン、彩湖ハーフマラソン。
- ・サイクリング大会（TOKYOエンデューロin彩湖）。

(2) 彩湖において水辺空間価値を高めるための具体的戦略

①水辺の多様なアクティビティを享受するための視点場整備

- ・水・陸双方で多様なアクティビティが展開されていることから、アクティビティの主体のみ楽しんでいる現状に対して、それを鑑賞する場（ビューポイント）の整備が求められる。

②簡易な施設整備によるビューポイント整備

- ・当該地はアクセス性の面から立地的不利にあるため、漕艇場でふれたような店舗立地は難しいと思われるが、現状として、茫漠とした広大な空間の中でビューポイントとして利用者が佇める場所が存在しないことから、簡易なビューポイント整備（ボードデッキ）を要所ごとに複数整備することを検討したい。

③河川管理者との調整

- ・上述した簡易なボードデッキ整備は河川管理者の許可が必要となるため、まずは水・陸双方のアクティビティや湖面景観が一望できる数多くのビューポイントを抽出し、その中でどこまで整備が可能であるかを検討したい。

4 水辺拠点と市街地（主要駅）を繋ぐ 戸田市流空間デザイン



写真5-12 戸田市の夜間景観

出典：戸田市



写真5-13 戸田市のリノベ倉庫

出典：戸田市



写真5-14 リノベ倉庫の事例「ささやカフェ」（墨田区）

出典：落合 正行（岡田研究室）撮影



写真5-15 サイクリストに人気のリノベ倉庫ホテル
「ONOMICHI U2」（尾道市）

出典：落合 正行（岡田研究室）撮影

概要

アクセス性が比較的良好な戸田漕艇場では、最寄のJR戸田公園駅を結ぶアクセス空間を中心に、住宅地エリアと住工混在エリアの双方において一層の景観形成を推進したい。

アクセス空間における戸田市流景観形成の考え方

(1) 水辺へのアクセス空間における景観形成の重要性

- ・水辺がいかに魅力的になったとしても、そこへ至るまでのアクセス空間が貧相であれば、まちのイメージはかえって低下しかねない。特に、戸田漕艇場は徒歩圏内にJR鉄道駅（戸田公園駅）を有することから、両者をつなぐエリア全体の景観形成が望まれる。これを端緒として、より広範に良好な景観形成が波及していけば市全体としての地域的価値も高まってこよう。
- ・つまり、中心市街を核とした景観形成というよりは、水辺とその主要駅までのアクセス空間及びその周辺エリアを中心として、そこから地域全体に景観の質的向上を促す手立てが本提案である。

(2) 地域資源を活用した景観形成方策

①住宅地エリア

- ・戸田市発の「三軒協定」をさらに積極的に推進することにより、日中は緑のコリドー形成、さらに夜間は本市の暗がり逆手にとって光のコリドー形成（イルミネーションによる“光の三軒協定”）を普及・促進させたい。すでに光の演出は一部住宅地にみられており、目を楽しませてくれている。

②住工混在エリア

- ・本市の地域経済を支える倉庫は重要な存在である。かつての倉庫は雑然とした印象を与えがちであったが、近年ではデザインが優れているものも現出してきている。ゆえに戸田市流イメージアップ戦略として「おしゃれな倉庫のまち」を体現する手立てを一考したい。そして、倉庫の用途転換の際にも、そのファサードは倉庫らしさを残し、倉庫ならではの無柱空間ゆえの大空間を有効活用する倉庫のエリアリノベーションを推進したい。